

十六ささげとごまのから

むかしむかし、北野神社の氏子に、どうにも手のつけようがない、ひとりものの、五郎兵衛というほうとう者の百姓がすんでおりました。

それはちようど、北野神社の秋まつりのことでした。五郎兵衛は、その日もまた、酒を朝からしこたまのみ、「ケツ、ばがこげえ、神さまなんてどこにもいるもんであつか。もしいだら、矢でも鉄ぼうでももってきて、このおれさまを、しこたまぶじめしてみろ。」と、大麥ごきげんでした。そして、夕方、五郎兵衛は、豊年踊りでにぎわう神社へでかけました。境内は、氏子達の豊年の喜びで、いっぱいの人だかりでした。

ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコドンドンドン、……、という大鼓の音にあわせて、十五か十六の娘が、一人で楽しそうに踊っているのが、踊りのわの中に